

第四段

むかし、ひんがしの五条に、大后の宮おはしましける、西の対に住む人ありけり。それをほいにはあらで、こころざし深かりける人、ゆきとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、なほうしと思ひつゝなむありける。またの年の睦月に梅の花ざかりに、去年を恋ひていきて、立ちて見、ゐて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣て、あばらなる板敷に、月のかたぶくまでふせてりて、去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ

わが身は一つもとの身にして

とよみて、夜のほのぼのと明るるに、泣く泣くかへりにけり。

第六段

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きにきけり。芥河といふ河を率ていきければ、草のうへにおきたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆくさきおほく、夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥におし入れて、男、弓、やなぐひを負ひて、戸口にをり。はや夜も明けなむと思ひつゝゝゝあたりけるに、鬼一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉かなにぞと人の問ひし時

露とこたへて消えなましものを

これは、二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてみ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御せうと堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内裏へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とゞめてとり返し給うてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて後のたゞにおはしける時とや。

第七十六段

むかし、二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近衛府にさぶらひける翁、人々の禄たまはるついでに、御車より給はりて、よみて奉りける。

大原やをしほの山も今日こそは

神代のことと思ひいづらめ

とて、心にもかなしと思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし。